首尾一貫感覚のライフキャリア・レジリエンスに対する関連の検討

○嘉瀬貴祥（立教大学現代心理学部）・上野雄己（日本学術振興会 PD）・
大石和男（立教大学コミュニティ福祉学部）

キーワード：首尾一貫感覚，ライフキャリア・レジリエンス，ライフキャリア

目　的

近年の雇用情勢をうけ，不安定な社会的状況においてもライフキャリアを確実に形成する資質を持つことが求められている。高橋ら（2015）はこのような資質をライフキャリア・レジリエンス（life-career resilience ; 以下，LCR と略記）と定義し，この資質を醸成することで積極性と受動性のバランスを保ちながら効果的にライフキャリアを形成することが可能であると示唆している。LCR は長期的展望，継続的対処，多面的生活，楽観的思考，現実受容といった 5 つの要因から構成されることが示されている（高橋ら，2015）。

LCR と関係する要因として，首尾一貫感覚（sense of coherence ; 以下 SOC と略記）が挙げられる。SOC とはストレスフルな経験をしながらも健康に生きる人々が保有するストレス対処能力であり，把握可能感，処理可能感，有意味感といった 3 つの要因から成る（Antonovsky, 1987 ; 園部，2017）。SOC は単なるストレス対処能力でなく，明確かつ柔軟な人生観であり，生涯を通じた課題解決，ひいてはライフスタイルやライフコースの形成に寄与する要因であることが示唆されている（Antonovsky, 1987）。このような SOC の特徴に鑑みると，SOC は LCR の醸成に関与している可能性があると考えられる。

そこで本研究では，SOC の LCR に対する関連性について，より具体的な知見を得るためにそれぞれの構成要因に注目して検討することを目的とした。

方　法

調査対象者は株式会社インテージの調査モニター639 名（男性 315 名，女性 324 名：平均年齢 20.4±1.3 歳）であった。倫理委員会の承認（17-30）を得たうえ，匿名性で実施された。調査対象者に対して 29 項目版 SOC スケール（山崎ら，2001）と成人版 LCR 尺度（高橋ら，2015）への回答を求めた。分析には統計解析プログラム HAD16.031（清水，2016）を用いた。

結　果

本研究の目的に沿い，把握可能感，処理可能感，有意味感を説明変数，長期的展望，継続的対処，多面的生活，楽観的思考，現実受容それぞれを従属変数とした多変量重回帰分析を行った。記述統計量の値を考慮し，男女別に分析を行うこととした。

男性　長期展望（$R^2 = .18, p < .01$）に対しては把握可能感（$\beta = -.38, p < .01$），処理可能感（$\beta = .18, p < .05$），有意味感（$\beta = .45, p < .01$）が，継続的対処（$R^2 = .25, p < .01$）に対しては有意味感（$\beta = .44, p < .01$）が，多面的生活（$R^2 = .19, p < .01$）に対しては把握可能感（$\beta = -.58, p < .01$），処理可能感（$\beta = .35, p < .01$），有意味感（$\beta = .30, p < .01$）が，楽観的思考（$R^2 = .23, p < .01$）に対しては有意味感（$\beta = .32, p < .01$）が有意な関連を示した。現実受容（$R^2 = .09, p < .01$）に対しては，有意な関連は認められなかった。

女性　長期展望（$R^2 = .22, p < .01$）に対しては把握可能感（$\beta = -.39, p < .01$），処理可能感（$\beta = .31, p < .01$），有意味感（$\beta = .37, p < .01$）が，継続的対処（$R^2 = .27, p < .01$）に対しては把握可能感（$\beta = .27, p < .01$），有意味感（$\beta = .40, p < .01$）が，多面的生活（$R^2 = .15, p < .01$）に対しては把握可能感（$\beta = -.43, p < .01$），処理可能感（$\beta = .29, p < .01$），有意味感（$\beta = .25, p < .01$）が，楽観的思考（$R^2 = .21, p < .01$）に対しては把握可能感（$\beta = .19, p < .01$），処理可能感（$\beta = .29, p < .01$）が，現実受容（$R^2 = .07, p < .01$）に対しては有意味感（$\beta = .17, p < .05$）が有意な関連を示した。

考　察

概観すると，処理可能感と有意味感を高めることは，長期的展望，継続的対処，多面的生活，楽観的思考といった現代社会におけるライフキャリアの形成に求められる資質の向上につながることが示唆された。性差や把握可能感の長期的展望と多面的生活に対する関連性については，今後さらに詳細に検討する必要がある。

付記：本研究において開示すべき利益相反はない。加えて，本研究は日本学術振興会科研費（課題番号：17H07163）の助成を受けて実施された。

（KASE Takayoshi, UENO Yuki, OISHI Kazuo）